

【一般の部受賞作】

「開かれ」た共同体、大宮盆栽村の思想圏

—雑誌『盆栽』の記事を手がかりとして—

横山 詢

論文要旨

さいたま市大宮に、数軒の盆栽業者を中心にして形成されるコミュニティ・大宮盆栽村（以下、盆栽村）がある。東京文京区の団子坂周辺で盆栽業を営んでいた職人集団が関東大震災の被災をきっかけに、当時の北足立郡大砂土村に集団移住したことをはじまりとするのが通説である。開村期に設計された区画整理や緑地景観は現代にも残り、盆栽業者の経営も持続されている。

盆栽村は、当時建設されていたユートピア的なものと同時代に成立しており、理念を部分的に共有している。しかしユートピア的な思想の多くが、商業主義的な思想に巻き込まれたり、ただ一部の文化人のみに閉じられたものに終始してしまったり、反対にあらゆるものに開かれすぎてしまい中心的な理念が失われてしまったり、たった数年でその存在が消えてしまったり、さらには多くない計画が途上で頓挫することになってしまった。一方盆栽村の場合は、盆栽愛好という同質性を求める特性に反して多くの盆栽素人の来訪を快く受け入れる土壌が作られ、現在に続くまで盆栽業者たちの持続的な生活が営まれている。

盆栽村の成立過程を分析することで、住民自治における、一見「閉ざされた」親密性が育まれることによってこそ未知なる他者の歓待へと「開かれる」というダイナミズムの把握と評価に示唆が得られると考え、盆栽村を題材として設定した。

研究の目的は、盆栽村計画に関わる思想を掘り起こすことである。盆栽／盆栽村に関する史料発掘と文献検討に臨み、それらを再構成する方向で研究を進めた。当時の盆栽界の潮流を表す雑誌『盆栽』の記述を主に参照しながら、盆栽村を社会史・思想史の中に位置づけた。

盆栽村構想の背景にあったものとして、当時の盆栽界で共有されていた思想である娯楽論、田園都市計画、社会改造論、大正新教育といった思想が確認できた。それらがハイブリッド的に組み合わせられ、さらには関東大震災によって他者への歓待が喚起されることによって盆栽村が実現されたものと整理した。その上で盆栽村を明治後期・大正・昭和初期という大きな時代転換期に位置づけ直し、他の歴史研究に与える示唆があることを指摘した。

本研究では盆栽村を社会史・思想史の中に位置付けることで、そこにあった自治を間接的に浮かび上がらせるアプローチを取った。この手法はある程度は成功したと思われるが、自治活動の実態を確認できる史料が多いに越したことはない。新たな史料を発掘していくことが課題である。当時の住民たちの姿が実証的に描かれることによって、本研究が検討した思想の部分もまた新たな意味を持つことになるだろう。